

令和元年度瀬戸市総合教育会議 議事録

▽日 時

令和2年1月29日（水） 午前10時から午前10時45分まで

▽場 所

瀬戸市役所4階 庁議室

▽出席者(順不同、敬称略)

【瀬戸市総合教育会議構成員】

瀬戸市長 伊藤保徳

教育委員会教育長 横山彰

教育長職務代理者 寺田康孝

教育委員会委員 加藤高明、二宮あづさ、中根志保、青山貴彦、田中直美

【事務局等】

副市長 青山一郎

政策推進課 課長 篠田康生、課長補佐 大羽健志、係長 伊藤陽一

教育部 部長 林敏彦

教育政策課 課長 松崎太郎、係長 幸村弘美、

学校教育課 課長 此下明雄、主幹 大岩三明

▽議題

- (1) 瀬戸市教育大綱（案）について
- (2) 意見交換
テーマ「小中一貫教育の推進について」
 - ア 協働型課題解決能力の育成
 - イ 郷土愛の醸成

▽議事内容

議事に先立ち、伊藤保徳市長から開会のあいさつがなされた。

- (1) 瀬戸市教育大綱の改定について
市長による会議進行のもと、教育大綱（案）の案について市長より提案され、瀬戸市教育大綱を原案のとおり決定した。
意見については、以下のとおり。

委員

日頃は瀬戸の子どもたちのために多大なるご理解をいただいていることに感謝申し上げるとともに、瀬戸の宝である子どもたちに対して今後とも変わらぬご支援を賜るようお願い申し上げます。

それでは、新教育大綱についてお話しをさせていただく。この令和2年度からは新学習指導要領が変わり、子どもたちの学習環境が大きく変わる年と

なる。2010年代から変わって、この2020年代の10年間というのはさらに重要であり、とりわけ、新教育大綱にも指定されている令和2年度から5年度までの最初の4年間は、非常に重要な期間となってくると思う。拝読をさせていただく中で、子どもたちや地域社会に住まう人々のために大変重要なことが書かれており、地域コミュニティの将来像の在り方の共有というところは重要だと考える。ただ単に住んでいる地域というだけではなく、それぞれが地域の一員であるという意識変革のきっかけにもしていただきたいと思うし、本文に書かれているように、誰もが参加できる機会を創出して具体的な取組みをぜひ推進していただきたい。

市長

この4月から大きく学校教育の環境が、仕組みの面も物理的な面も変わる。(施設)一体型の小中一貫教育はもちろん、今回のにじの丘学園以外の中学校区においても小学校・中学校が違う場所にある状況で、切れ目なく教育をやっていくというのは大変大きなチャレンジだと考えている。ご理解と理念の共有がとても大切だと思っており、地域のご協力がなくてはならないと考えている。

(2) 意見交換について

市長進行のもと、資料2を参考に意見交換を行った。

意見交換の内容は以下のとおり。

委員

「地域とともにある学校」というところで少しお話しさせていただきたい。新教育大綱にも書かれているが、教育は社会全体で取り組んでいくものと思っており、能動的に行動できる、いわゆる財源(人材)をいかに発掘して、いかに地域教育に関わっていただくかが肝の部分になると思っている。これは、子どもたちの個性を伸ばして、自立性や社会性を養っていくことにつながっていくと思う。先ほど市長が触れられた内容にも関わってくるが、新しくできるにじの丘学園においては、2つの中学校と5つの小学校が一つの学校になるわけだが、その中で特に小学校では5校それぞれの特色、バックグラウンドがあると思う。その5つの特色を一つの学校に持ってくることによって、新たな人の出会い、新たなそれぞれの文化が融合し、シナジー効果として一つの学校の力になっていけば大変良い学校になっていくのではないかと思う。ただ、4月の開校ということで、今、「地域とともにある学校づくり」という点では準備段階にあり、総合的な受け皿というものが、まだしっかり確定していない。細部にわたっていくと、例えば、いわゆるコミュニテ

ィスクールやPTAがどのような形で関わっていくか、基本的な決めごとがまだ決まっていないという部分と、運営していく中で柔軟に変えていくという決めごと自体がまだしっかりと決まっておらず、先ほど私が申し上げたことと少し重複するかもしれないが、文化を融合させることで新しい・良い力になっていくという反面、それぞれの根幹、自分たちのバックグラウンドをあまりに引きずり出して、それぞれの代表のような形で発言をしていくと、結果的には「祖母懐からきました」「古瀬戸からきました」とお互いのことを譲らないということになってしまうのではないかと、そこは危惧している。関係各所の皆さまと建設的な意見を交わしながら、一つの形にしていくことが大切なことかと思う。

既存の6つの中学校区でいくと、新しい小中一貫教育が今後始まることになるが、いわゆる一つのブロック、小・中学校としては相互交流という下地はしっかりできていると思う。そこに今までの方が、子どもたちが卒業して学校との関わりがなくなっても、その方が常にずっとやっているということ、そのような状況がおそらくずっと続いていると思うが、協働できる人材の輪を広げていくというのが、6つの中学校ブロックで今後必要になってくるため、能動的に動ける人間の人口を増やしていくことが大切になってくると思う。

地域の中で、いわゆる三世代という言葉もあるが、世代や背景も違う方々に学校・子どもを中心として誰もが参加できる、交流や体験ができる機会の創出を進めていただくということが大事である。関わったことがない方に、いきなり大きな行事を行うということばかりだと負担に思ったり離脱してしまうといけないため、小さな成功体験を積み重ねていって、言葉が適切かはわからないが、地域に関わっていくことのマジックにかけていくということが大切だと思う。地域コミュニティの将来像の問題解決に、率先して行動いただける人材を養っていくことが必要である。

また、関わりが薄い方に関しては、形にとらわれず、得意分野や目的が賛同できたり学校に関わるときだけ、まずは関わっていただいて、何かあったときには学校に関わっていただく。いわゆる離合集散型、学校に思いを寄せていただくことが、おそらく今後、子どもたちが大人を見ていき、生き抜く力の醸成のきっかけになるのではと思っている。

市長

いろいろな地域の、いわゆるローカル性はもちろんあるが、さらにその細分化した「〇〇地区」「〇〇連区」というのがある。最初から画一的なものというよりも、なるべく今おっしゃったように輪を広げていくとかお互いに協

かし合うという、現在7校の小学校でいくと5つの連区があり、それぞれのPTAさんが一つの現場で話し合っていると、そんなことまでやっているの、というPTAもあり、この間のPTAの研修会でもそういった話があった。ゆるやかなコミュニティの形成をしていくという話で、いろいろな場面でいろいろな方々のまさに多様化した中、一つの方向・集まりで、子どもたちが中心という方向で進めていければと思う。

委員

先ほどまとめていただいた、教育大綱の中の三段目にあるが、情報化の急速な進展、社会環境の変化に際して、私自身もやはりここは相当大事なことであると思う。4月から始まる小中一貫校もそうだが、小学校では新学習指導要領についてプログラミング学習あるいはプログラムの学習ということで、今の社会で情報が使われている中で、新しい機器などを使って、子どもたちがそれに乗り遅れないよう進めていけるような形が望ましいと強く思っている。新しい学習指導要領の話でいくと、協働型課題解決能力ということで、子どもたち自身が自分たちで身に着ける、自分の生き方を探っていくというようなことで、ある面でいうと、情報化社会の中でそれを扱ってものにしていくことが大事になってくる。

それから、情報を扱ううえでの負の側面もあり、情報モラルといった、子どもたちが小さいときからわかるような形で慣れ親しんだ、ということが教育委員会として小中一貫教育の中で、子どもたちが情報端末に触れながら、いろいろなことが体験できるようになってほしいというのがある。そのような必要性を十分理解いただいて、進めていけるといいと思う。

また、もう一つの話であるが、子どもたちがゲーム遊びをしたり、要は、室内で遊ぶような形が多くある。それからまた一方で、外で自由に遊べるような環境はなかなかない、というようなところがあるが、情報化への対応の話とは別として、子どもたちの体験・経験…失敗も含めてそのような経験もうまく自分のものとしていく、というのも必要だし、豊かな感性を育むということでもいろいろな側面がある。外で遊ぶようなこともモアスクールという話だけでなく、学校が終わった後の話として少し考える必要があるのではと思っている。とりわけ、にじの丘学園の話でいうと全体の学区が広い、子どもたちが近くで同級生と遊ぶというような機会も少ないため、まずは先ほど委員もおっしゃっていた話で、学校を支える形をどううまく構築していくかということも大事だし、またそれとは別に子どもたちももっと安全のために、学校に行って帰すだけではなく、そんな簡単にいく話ではないが、もう少しそのようなことも目をかけていただくと良いという問題意識を持っている。

そのあたりで良いお知恵があれば、と思う。

市長

委員からまず一点目として、情報化社会において、子どもの時から情報端末をうまく活用しながらも、情報モラルを身に着けるといいうのも学校現場では大変重要なことだと思う。国からも一人1台端末という大きな方針が出されたため、本市もそれに乗り遅れることなく環境整備にまい進していきたいと思っている。

二つ目におっしゃった中遊びだけであるとか外遊びをどう考えているかということも、地域の子ども会などでそれが学年を超えた異学年の交流ということで、これは今でも道泉小学校や深川小学校では異年齢での学校行事を非常に有意義に実施しているため、それをうまく、にじの丘学園でも使えたら、あるいはにじの丘学園からの発信で、むしろ小学校で800人・900人という大きい学校ではそういったことがあまりできないため、これも工夫をしながら進めていけたらと思っている。

委員

私の方からは、2つに視点を絞って意見を述べさせていただく。

小中一貫校に特化するわけではないが、コミュニティスクールというものが、現在のところ長根小学校区にて始まって、実際に研究発表も伺っている。にじの丘学園においても、コミュニティスクールを推進していくと言っている。先ほどの教育大綱の中にもあるが、視点の中に、家庭・学校・地域共に社会全体の子どもたちへの横の連携で、横という言葉、そして生涯学習に向けて、年齢成長において切れ目のない、これも一人の個人ではなく、すべてのそこに住む方の年齢を縦の糸と考えると、横と縦の糸を織りなすのが学校ではないかという、情緒的な表現となるが、そういったものを包み込む形の大きな布を織っていくのがコミュニティスクールの在り方ではないかと思う。地域にいらっしゃる、今まで培われたお一人おひとりの力を学校に生かしていただき、子どもたちと接していただくことが、また地域で孤独にお住まいになっている方にとっても学校に参加することによって、そこで力を得ていただくというような縁も含めて、生涯学習の場であるということも言えるのではないかと思う。それぞれの地域での年齢を超えたつながりができることがコミュニティスクールの根幹であるということが望ましいのではないかと思う。

そして二つ目として、やはり今度の新学習指導要領にも含まれている、すでに始まっている小学校からの外国語活動、これも本格的に取り入れられて

いくため、ただ言葉として学ぶ・外国語として学ぶのではなく、今までの瀬戸市においては水野中学校そして本山、祖東、それぞれの中学校が異文化圏の学生との交流・行き来をしている。そういった実績が瀬戸市にはあるため、そこで培ったノウハウも元にして広い範囲での国際交流ができるということは一つ重要な教育の視点になるのではないかと思うし、また地域によっては7校統合されているにじの丘学園についてはまだ少ないと思うが、学区によっては光陵、幡山、原山といった連区では非常に国際化の進んだ地域であり、一つの教室に様々な国籍を持つ子どもたちもいるため、そこで培われた各小中学校での先生方のノウハウもすべて引き込みながら国際理解を進める一助になるのではないかと思うため、今後も引き続き子どもたちの国際教育に理解が進むということ、今後の瀬戸市の教育に推進していただけたら、また瀬戸市の発展につながるのではないかと思う。

市長

コミュニティスクールは、試験的といいますか、長根小学校区において昨年来、いろいろ進めており、毎回の研修会では大会議室が満員で、大変ご熱心に議論いただいております期待も大きいですが、すべての学校あるいはすべての中学校区でそれができるかというのは、それは難しいというところであり、実践しながら進めていくことになると思う。

国際交流等については、カリキュラムの中に英語についてもあるが、いろいろ工夫が必要かと思っておりますため、いろいろ教育委員会としてご意見を出していただきたいと思っております。

委員

コミュニティスクールにつきまして、先ほど委員もおっしゃっていたように、これまでもわたくしども定例教育委員会で、長根小学校の試験的な活動、取組みを紹介していただいた。学校と地域の共存については、資料2に掲げられているところであるが、そもそも少子高齢化の中で、高齢者の方にご活躍いただける、そのようなこと自体が意義深いことであると思うし、また瀬戸という比較的歴史の深い市での教育の在り方として非常にそぐうものではないかと考えている。

P T A活動やボランティアなど、学校と関わりを持ってくださる方々を大切にして、その方々が関わりを持っていただきやすいように、また関わりを広げていっていただけるように、そのような仕組みをこれからできる限り作っていく、また先ほど市長がおっしゃったように実践の中で試行錯誤していくことで学校すなわち児童生徒のみならず、そこで働く教員のためにも地域

の方々にとっても有益になればと考えている。

市長

いろいろな現場の方でのご視察をいただいたり、あるいは話し合いに参加いただいていると承知しているため、ぜひ具体的な部分や本業のお立場からもアドバイスを頂戴できればと考えている。

委員

コミュニティスクールで、以前から評議員制度というものがあると思うが、今、コミュニティという言葉に縛られすぎず、弁護士がこういったところに関与させていただくことで、児童生徒のためはもちろんだが、そこで働く教員のためにも、何かバックアップできればと思っている。微力ではあるがその橋渡しをできればと思っている。

委員

小中一貫校の中では、発達段階に応じて変則性・継続性のあるプログラムが組めればと思っており、子どもたちが集団社会の中で自分らしい生き方をして、育っていってくれるようになるのではと思う。また、それを願っている。それがまず一つ目である。

それからもう一つは、キャリア教育。これは文部科学省が提唱して20年近くなると思うが、だんだん制度的な広がりもあり、その中の一つとして就業体験活動があるが、硬直化しているといった印象がある。具体的な例でいうと、病院に中学生の方が就業体験活動に来て、女性だったらヘルパーさん看護師さんの仕事に付いて一緒に回る。どうしても見学的なものになるが、学生さんの声は、「本当は、私は医師の仕事が見たくて来た」と。コードブルーというドラマがあり、それで興味を持っているということで、それはいいことだね、と、じゃあちょっと外来を見る？と言って、見てもらった経緯があった。小中一貫教育で裾野が広がるため、そうした就業体験活動でも幅広く、希望を入れるような形で行えるのではないかと考えている。

市長

本市におけるキャリア教育は大変歴史があり、10数年たつと思うが、文部科学省・経済産業省にも注目をいただいている。運営の受け皿が商工会議所になるのがなかなか稀有な例であり、そのような面では市内にある多くの企業の皆さまが大変協力的で受け入れていただいている。職場体験だけがキャリア教育というわけではないが、非常に象徴的であり、記憶に間違いがな

ければ今でも160名くらいの講師の方がおみえで、学校の方にお越しただいているが、これは本市の特徴の一つとして、さらに今後も質を上げていくということを考えている。

委員

私は、地域とともにある学校づくりの推進には、地域の力・家庭の力・学校の力が重要なことだと思っている。かつて近所付き合い、コミュニティがあった時代は他人や異年齢でも交流が当たり前だったが、今、核家族化が進んでおり、学校でコメづくり、おこしもんづくり等、地域との関わりや異学年との交流といった取組みを行っているため、そのような関わりもあると思うが、本当に地域の力・家庭の力・学校の力で瀬戸市の子どもたちを見守っていきたいと思っている。

また、大綱にもあるように、子どもたちを取り巻く環境が複雑化・多様化しており、AIの発達など情報化の急速な進展、社会環境の変化が目まぐるしい。この先もこの環境は加速するものと思う。AIに負けない社会人となるためには、コミュニケーション能力を高めることが必要だと言われている。子どもたちが、社会的な課題や身の回りの課題から解決すべき課題を発見し、仲間と協働して必要な情報を集め、他者に自分の意見や考えをわかりやすく伝える能力を養い、他者を認める心を身に着けてほしいと考える。瀬戸の子どもたちに心優しく健全に育ててほしいと思っている。

市長

コミュニティスクールは、いろいろな顔、方法があるわけで、今までどちらかといえば、ご高齢の方や地域の方々が朝と帰りの通学路、8030運動をやっていた。地域で子どもたちを育てる、ある面、コミュニティスクールの一部というような風にやっていると、もっと交通安全に対することであるとか、幡山中学校区で児童生徒の安全確認という、校門を通過すると親御さんへ信号がいくという非常に初歩的なものを行っているが、子どもたちを監視という側面ではなく、見守りながら共に育てていき、何かの変化に周りの大人が気付くというようなことが重要な時代だと思っており、地域の方という視点と教育委員という視点でご意見あるいは忌憚のない提案を頂戴できればと思っている。

最後に教育長にご発言いただくつもりだが、その他に何かご意見であったり、言い足りないことがあればご発言をお願いしたい。

委員

今、市長がおっしゃったとおり、新しい学校、先ほどからにじの丘学園という例が示されているが、地域で育てていくということは、子どもたちの顔を見て、子どもたちはどのお宅のお子さまか、そういったこともわかるため、防犯といった側面もある。そうした切り口、いきなり事業に参加しろだとか地域に参加しろということではなく、昔は誰がどこの子かということもわかっていたと思うため、昔にかえることが進化につながると思う。そのようなことが、今、求められていることではないかと話を聞いて思った。

市長

いずれにしても、主役である子どもたちが健全に育っていくために、いろいろな視点でいろいろなお立場からご意見を頂戴しながら、それをカリキュラムや教育指導の中で反映していくことが重要だと思っている。瀬戸市がワンチームになって、子どもたちを育成していくということを改めて確認させていただいた。皆さんのご意見への感想も含めて教育長からご発言いただきたいと思う。

教育長

委員の方々から、いろいろなお立場からご意見を頂戴したところである。

私の立場からは2点お話をさせていただく。

4月からいよいよ小中一貫教育が本格的に始動していくが、義務教育は1年生から中学校3年まで、9年間、途切れることなく足踏みすることなく、次の学年につなげていくことが必要だと考えている。そのためには、教える先生方がしっかりとそのあたりを認識する必要があると考えている。具体的には小学校の先生は、中学校での学習や子どもたちが中学校を卒業する姿をイメージして教育する必要があると考えており、中学校の先生は逆に、小学校のどの学年でどんなことを学び、この子は何につまづいて今があるのかを知ったうえで教育をしていかななくてはならないと考えている。

そういった一連のつながった環境づくり、これを作り出すステージが、まさに小中一貫教育であると、その一貫教育の取組みの中で教員の乗り入れや異学年交流などの教育活動を進めていきたいと考えている。

このように知識習得も当然教育には必要だが、これに加えて人のつながりを意識・重視した教育を展開して中1ギャップやいじめに対応していくという所存である。

これらの一貫教育においては、にじの丘学園はもとより分離型の中学校ブロックにおいても推進、発展し進化させていく。

2点目で本市の教育の特色として「自ら考え、学び、生き抜く力」である

協働型課題解決能力の育成を掲げており、今回の教育大綱の中でもうたっている。

ある大学の教授の言葉だが、これからの教育を『知識の記憶・暗記型の学びから思考・創造型への学びへと変化させなければならない。その教育を強化する最重要アプローチが情報化でありコンピュータやインターネットを使った学習、自分が学びたいことを学べる』という風に言っている。このように本市が目指す教育には、早期のICT環境整備は必須であると考えている。

また、本市では以前よりキッズアカデミーやロボット博に取り組んできた。そのノウハウや蓄積、地の利、こういったものを活かしながら、先ほどから出ているコミュニティスクール、こういったものを活用して学校と地域、企業がICTにより有機的につながることで質の高いキャリア教育、義務教育などに取り組んでいくことができるものと考えている。それこそが、まさに瀬戸市ならではの教育となっていくものと考えている。

市長

一貫して、この4月から始まる小中一貫教育をどう成功させていくかがここ数年の大変大きなハードル、課題と言ってもいいと思う。ぜひ、早め早めにカリキュラムの改善であったり、子どもたちの教育環境に関わる改善であったり、家庭・地域そして学校の連携に関わる問題、いろいろな面があると思うため、どうか引き続きよろしく願いしたい。

以上で一通りのご意見を頂戴した。

貴重なご意見をいただいたが、一つでもふたつでも早く実現化して、実りある行政にしていきたいと考えており、委員の皆さまには引き続き、ご協力・ご支援を賜りたいとのお願いを申し上げて、令和元年度の総合教育会議を終了とさせていただく。本日は誠にありがとうございました。